

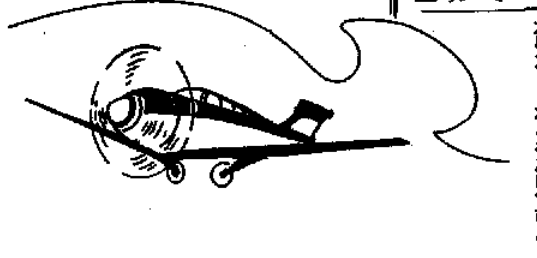
寒風吹きつける中、路上で眠る労働者ら  
＝3日午後10時、大阪市西成区萩之茶屋1丁目

# 不況憎し路上の正月 あいらん地区 野宿最悪の500人

大阪市西成区あいらん地区(釜ヶ崎一帯)で、この年末年始、野宿を余儀なくされる周辺労働者が不況のおおむね増、「史上最悪」といわれた昨年より

あいらん地区 野宿最悪の500人  
一・五倍一・二倍近いのぼってト教団体が「あいらん総合セン」いる。地元の労働組合、キリストの野の道路に布団を敷いて寝た仮眠所では、年末から、今日十六日まで、朝、初日の野宿者は二百二十一人、昨年より約倍多い。二十七日夜からは、二百三十人以上、二日夜からは、四百人以上、二日夜は四百六十人がこみよながら一夜を明かした。昨年同様は三百人前後で百一十五人、一組の布団に二人、三人居るが、ピロティの軒下は「足むす」一部は路上や、同センター周囲のわずかな軒下まで見み出している。

また、キタチミナミのターミナルで寝施しているパトロールでも、連日、昨年の一・五二



トロールはおつちちゃんたちのためになつていゝらるうか。一人ひとりが自分の人生を歩むために役立つていゝらるうか

それでも、トロールに行く。それが生命にかかわる、当面の問題であるから。ここ釜ヶ崎は、やはり「しな

ければならない」場所なのだろう。(一年間ボランティア)

倍の二百九十九人、五百八十五人の野宿者が確保され、一部が仮眠所に保護されている。野宿者が急増した理由として、地元の労働者キリスト教関係者は、うち多く不況で若い層でも仕事先が「置」がつかない、ない限りの就職が困難になつていゝらる。大阪市の今年から正月三日日曜、年末年始の臨時泊泊所入所申し込み受け付けを中止のキタチミナミで「浮浪者道放」のクリン作戦が進み、野宿者の回帰を促して生計を立てていゝらる。底辺層の浮浪者化に拍車をかけた一なきをあげている。

# 越冬パトロール

小野 達也

「道に倒れている人がいたら、あなたはどうしますか」最近こんなアンケートを受けたことがある。「道に倒れている人」それは今任んでいゝ釜ヶ崎ではあまりに日常的な光景。この五月から昼夜を問わず、四季を問わず、数多くそうした場面に出くわしてきた。「道に倒れている人がいたら……」そのアンケートにはとても答えることができなかった。

12月26日、すでに昨日から越冬パトロールは始まつていゝる。午後10時少し前、寒くないようにと充分身支度をして集合場所のあいらん労働センターの一角にある、医療センター前へと向かう。吐息が白い。「さあ、いよいよ」と思うと、妙に肩のあたりに力が入つていゝるのを感じる。

の人と話をしている者。皆少し落ち着かないように感じられる。越冬闘争実行委員から簡単な説明を受け、二つのグループに分かれて、トロール開始。夜の釜ヶ崎を20、30人の集団がざわつきながら進んでゆく。物陰、藪の中、はては車の下まで注意しながら見る。この冬、釜ヶ崎の労働者に対する行政側の姿勢は一段と厳しい。「寝る場所」のことだけを考へてみても、例年千数百人は入れていた南港にある越冬用の臨時宿泊所も今年は千人を割つていゝと言われり。さらに病弱者が入所できていた自衛隊もこの正月は受付をしなかつた。もちろん飯場(働き場)もなく、ドヤも満員。釜ヶ崎は飽和状態になつていゝる。新今宮駅近くのガソリンスタンドに動かないでいゝる人がいゝる。話しかけてもほとんどの反応をしない。とても歩けそうもない。ふとんを積んだリヤカーが呼ばれた。一緒にまわつていゝる労働者が言つた。

「これは、越冬の救急車やからなあ、一足と頭を抱えてリヤカーに乗せろ。寒さのためからか、体は硬直していゝる。ともかく、センター前まで運ばれてゆく。センター前、それは異様な光景である。釜ヶ崎の軒下に一面に敷きつめられたふとん。それぞれ、もつとりと肉厚になつていゝる。そこにおつちちゃん達が体を寄せ合つて眠つていゝる。年をとつた人がいゝる。意外に若い人も混じつていゝる。体の悪い人もいゝる。一日中火にあたつていゝる、まっ黒になつていゝる人もいゝる。一人ひとりがどんな歴史を持ち、なぜここにいるのかは知らない。ただ、皆一緒に寝ていゝる。頭上に冬の星が光る。(センター前に寝る人の数は、ピーク時で五百人を越えた。1月4日) 駅の逆側まで一度出て、再び引き返し三角公園を目指す。道々、布団で寝ていゝる人の状態を確かめ、酔い気分でフツついていゝる人には声をかけてゆく。シャッターの降りた店の前で、初老のおじさんがへたり込んでいゝる。眠つてしまつていゝるようだ。「おつちちゃん、おつちちゃん、どうしたの」「ここは寒いよ、センター

1前まで行くと布団があるから、そこで寝ようや。ようやく気づてくれる。これなら歩いてゆけそう。手を支えて、立つてもらおう。酒の入つた体がズシリと重たい。手とりながら、おじさんの歩みに合わせて進む。「すんませんなあ」「迷惑かけますなあ。そんな言葉を何度となく口にする。「おじさん、もうそんなこと言わんといてーや。おじさんの歩みに合わせてゆつくり、ゆつくりセンターに向かう。三角公園、四角公園を経てパトロール隊が帰つてくる。別方向へ行った組も合はまつて、今日の報告を受ける。このぐらゐの時間になると立つていゝるだけでも足の底から寒さが直に伝わつてくる。すでに12時に近い。徹夜して警備にあたる一隊を残して、パトロールは終わりとつた。気分が重い。何となくスッキリしない。今日の釜ヶ崎はいつもの見慣れたものだった。何ら特別なものではなかつた。普段なら、いちいち声などかけない。助けおこしたりしない。パトロールだからやるのか。パトロールでしかできないのか。なぜ? それにこのパ

# 越冬活動に支える支援者

「一人の死者も出さず」を合言葉に、釜ヶ崎では今年も第十四回越冬闘争が行なわれています。毎日三回の炊き出し、医療活動、夜間パトロールなど、大変な活動です。慢性的な不況に軍拡、福祉切り捨てのしわ寄せがもたら現われています。これまでの最高の青カン（野宿）者。加えて今年はこの寒さです。

炊き出しは年間通して行なわれます。釜ヶ崎キリスト教協友会は二月一杯、毎週月、水、金夜十二時から夜間パトロールを行ないます。そのため次のことをお願いいたします。

- 1 年間を通してお米、調味料をお寄せください。
  - 2 昼間の炊き出しをお手伝いください。
  - 3 夜間パトロールに参加してください。
  - 4 オーパー、毛布、布団をお送りください。
- ・参加者は十一時三〇分から十二時まで  
・希望の家にお集まりください。  
・宿泊希望者はふるさとの家（〇六一六四二一八二七三）に予約してください。

## 神学校後援と釜ヶ崎支援の両立の必要性

住山哲夫

### I 問題の提起

一九八三年六月三日西教区常議員会の休憩時間に神学校後援会関西地区世話人の方が見え、教区常議員との間で有益な意見交換がなされたようである。私は他の用務により遅参し、話の全貌を聞くことができなかったが、最後の部分で次のような意見が出たように記憶する。

教会財政、信徒の献財共に出費多端の折から「神学校の後援」「釜ヶ崎の支援」「その他ブラジル伝道、アジア・アフリカの人々との連帯等」多くの課題に対し、何を重点とすべきかという問題で、次のような議論があった。

(1) 神学校の後援  
牧師養成とその質的向上はルーテル教会の将来にかかわる事項であり、ルーテル教会プロバニーの問題として教会が担わねばならない最低限・必須の課題である。

(2) 釜ヶ崎支援

経済大国日本の裏面ともいえる釜ヶ崎の働きと、その業の意義・重要性はよく理解できる。しかし本来この問題は国・地方自治的のもっと積極的に取り組むべき課題であり、また関西を中心とするキリスト教界超党派での支援がなされている現状と、課題の本質にかんがみ、果してルーテル教会プロバニーの課題、必須の問題といえるであろうか。

### (3) その他の支援

問題の緊急度、重要性によりその都度判断してゆくべき問題であろう。

このような議論は従来から事に触れ耳にするところで、ひとり上述の場での意見に止まらない。限られた財源、信徒の教会での支援は重点指向が検討されることは当然であるが、(3)はここで触れないとして上記のような論旨から(1)と(2)がトレード・オフ（あれかこれかという重点選択）の問題にな

毎月二回、第一火曜日と第二月曜日に喜望の家前で路上バザアが行われる。全国から寄せられた古着が整理され、卓球台二台に山と積まれる。それに群がる労働者。「93¢のズボンないか」。綿しく話しながら手際よく差し出すボランティアたち。第二月曜日は稲葉マサさんたちのグループだ。

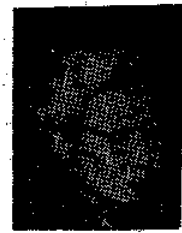
### 支える人たち ③

住之江ボランティア連絡会

## 稲葉マサさん

稲葉さんが喜望の家に来だして七年。「きっかけは、地域から古着をいっただいで、男性もの必要な所はないか、というこ」とで、大阪ボランティア協会の紹介です。

子育てを終え、稲葉さんは、「困っている人に少しでも役立てたら」と昭和四十六年、住之江ボランティア・スクールを受講。



「です」。稲葉さんの小さいとき両親が離婚。「母の連れ子として親戚をたらい回しにされ、大阪に出て結婚するまで不幸でした」。喜望の家は、こういう人の痛みがわかるというか、共に生きようという人たちに支えられている。「ずっと続けてきたい。できれば、ここへ来る日を多くしたい」

り得るであろうか。

この問題は、わが国の教会が現在から将来へと向う時の流れの中で、内的・質的充実をはかりつつどのようにこの世に働きかけ、教会形成を行なっていくかという古くて新しい課題を象徴しているように思われる。その原点は、聖書「福音」信仰の証しという図式上にとらえねばならないが、「信仰の証し」をキリスト者の内面的・個人的視野から再吟味する立場と多くの宗教・教団が併立するわが国の状況の中に位置づけ、社会的視点から吟味する立場がある。前者については別稿「福音、信仰、証しと釜ヶ崎への視点」で論じたので、本稿では後者の視点から考察を加えたので、ご批判を賜りたい。

### II 福音と信仰の証し

教会、キリスト者の使命である「伝道」の意味するところは多岐にわたるが、その骨子は次の二点に集約される。

○福音が宣べ伝えられること。  
○御言に養われた群が世に仕え、その立場、持場において福音・信仰の証しをすること。

### 1 宣教

キリスト教の歴史は常に宗教・伝道によって形成されてきた。海外伝道が低調に見えるときであっても内国伝道によってその活力が保たれたのである。しかし、これはキリスト教に特有なことではなく、仏教においても、その北伝（大乘）、南伝（小乗）の経緯、中国の法顕、法奘等の求法・訳経の業や、わが国への渡来僧、最澄（伝教大師）、空海（弘法大師）の求法渡唐もまさに伝法の受容と布教の歴史であった。

さらに、貴族階級を対象とし、国家鎮護をこととする奈良・平安仏教から、庶民・下級武士階級を対象とし、衆生済度を目標とする鎌倉仏教への脱皮は、まさにわが国への仏教土着化を示すものであった。たとえば、法然、親鸞等の人間観とその生涯、日蓮の強烈な個性、道元等禅家における宇宙・自然・死生観等は、いろいろな意味で私ども日本人の心にしみわたる素晴らしいものであるし、新興宗教の教祖的指導者にしても、その神観・教義に関する議論はともかくとして、人間としての個性・魅力によって民衆の心をつかんでい